

完訳 楊家将演義 《上巻》・目次

人物紹介

地図（◆楊家将演義 主要地図（燕雲十六州とその周辺）、◆北宋・遼・西夏）

プロローグ ～南北宋志伝について～

完訳 楊家将演義 本編

北宋志伝 卷一

（宋太祖、開宝八年乙亥の年より、宋太宗、太平興国元年丙子の年まで、凡そ二年の事を記す）

- 第一回 北漢主、忠臣を屏逐い 呼延贊、激烈て仇を討つ
第二回 李建忠、力めて義士を救い 呼延贊、夢に神より武を教わる
第三回 金頭娘、征場にて武芸を闘わせ 高懷徳、潞州にて大いに戦う
第四回 和議を講じて楊業、兵を回し 繼駕を迎えて豪傑、能を施す
第五回 宋の太祖、後事を遺囑し 潘仁美、計もて英雄を逐う

北宋志伝 卷二

(宋太宗、太平興国二年丁丑の年より、太平興国四年己卯の年まで、凡そ二年の事を記す)

- 第六回 潘仁美、詔を奉じて召を宣べ 呼延贊、单騎駕を救う
- 第七回 北漢主、議りて河東を守り 呼延贊、力めて敵將を擒にす
- 第八回 李建忠、議りて接天関を取り 大遼、兵を出して晋陽を救う
- 第九回 郭進、大いに耶律沙を破り 劉鈞、勅書もて楊業を召す
- 第十回 八王、反間の計を進献し 楊光美、使いを奉じて楊業を説く

北宋志伝 卷三

(宋太宗、太平興国四年己卯の年から、雍熙三年丙戌の年まで、凡そ七年の事を記す)

- 第十一回 小聖、夢に感じて太原を取り 太宗、議を下して大遼を征つ
- 第十二回 高懷徳、幽州にて大いに戦い 宋の太宗、師を班して汴に還る
- 第十三回 李漢瓊、智もて蕃將に勝ち 楊令公、大いに遼兵を破る
- 第十四回 将士を犒いて趙晋、官を辞し 群臣に宴して宋琪、詩を賦す
- 第十五回 曹彬、兵を部いて大遼を征ち 高懷徳、岐溝関に戦死す

北宋志伝 卷四

(宋太宗、雍熙四年丁亥の年より、淳化二年辛卯の年まで、凡そ五年の事を記す)

- 第十六回 太宗、五台山に駕幸し 淵平、幽州城に戦死す
- 第十七回 宋の太宗、北番を征たんことを議し 柴夫人、楊業を保たんことを奏す
- 第十八回 呼延贊、大いに遼兵と戦い 李陵碑にて楊業、節に死す
- 第十九回 瓜州の営にて七郎、射に遭い 胡原の谷にて六郎、救いに遇う
- 第二十回 六郎、汴京にて御状を告げ 王欽、計を定めて八王を凶らんとす

北宋志伝 卷五

(宋太宗、至道元年乙未の年から、宋真宗、咸平二年己亥の年まで、凡そ五年の事を記す)

- 第二十一回 宋の名臣、官を辞し印を解き 蕭太后、中原を凶らんことを議す
- 第二十二回 楊家将、晋陽にて武を闘わせ 楊六郎、鎮三関を領す
- 第二十三回 樵夫、詭計もて孟良を捉え 六郎、单騎にて焦贊を収む
- 第二十四回 孟良、智もて驢驪馬を盗み 岳勝、大いに蕭天右と戦う
- 第二十五回 五台山に孟良、兵を借り 三関寨にて五郎、象を観る

* * * * *

《下巻収録内容》

北宋志伝 卷六

(宋真宗、咸平三年庚子の年から、咸平六年癸卯の年まで、凡そ四年のことを記す)

- 第二十六回 九妹女、誤って幽州に陥り 楊延徳、大いに番兵を破る
- 第二十七回 王枢密、計もて無佞府を傾け 謝金吾、勢いもて天波楼を毀つ
- 第二十八回 焦贊、怒りて謝金吾を殺し 八王、智もて楊六郎を救う
- 第二十九回 宋の君臣、魏州にて景を看 王金節、銅台にて兵を交う
- 第三十回 八王、詔を賈し六郎を求め 焦贊、大いに陳家莊を鬧す

北宋志伝 卷七

(宋真宗、景德二年乙巳の年から、大中祥符四年庚戌の年まで、凡そ六年の事を記す)

- 第三十一回 呼延贊、途中にて救いに遇い 楊六郎、大いに遼兵を破る

北宋志伝 卷八

(宋真宗、大中祥符五年壬子の年から、大中祥符八年乙卯の年まで、凡そ三年の事を記す)

- 第三十二回 蕭太后、榜を出して兵を募り 王全節、大遼へ出征す
- 第三十三回 呂軍師、南天陣を敷き 楊六郎、公に三関を出る
- 第三十四回 宗保、神に遇いて兵法を授かり 真宗、榜を出して医人を募る
- 第三十五回 孟良、白驪馬を盗み走り 宗保、穆桂英と佳き遇す
- 第三十六回 宗保、衆を部いて天陣を看 真宗、壇を築いて将帥を封ず
- 第三十七回 黄瓊女、反つて宋宮に投じ 穆桂英、陣を破りて姑を救う
- 第三十八回 宗保、議りて迷魂陣を攻め 五郎、蕭天左を降伏せしむ
- 第三十九回 宋の真宗、詔を下して師を班し 王枢密、反間を用いるを進む
- 第四十回 八殿下、三関に兵を借り 衆英雄、九龍に武を闘わす

北宋志伝 卷九

(宋真宗、大中祥符九年丙辰の年から、天禧元年丁巳の年まで、凡そ二年の事を記す)

- 第四十一回 楊五郎、糧秣を付心け 八娘子、大いに遼兵と戦う
- 第四十二回 楊六郎、議りて北境を取り 重陽女、大いに幽州を鬧す
- 第四十三回 大遼を平らげて南將、師を班し 官誥を頒ちて、大いに功臣を封す
- 第四十四回 六郎、楊業の骸を取るを議り 孟良、誤りて焦贊を殺す
- 第四十五回 禁宮中に八王、北斗に祈り 無佞府に六郎、寿命を終える

北宋志伝 卷十

(宋真宗、天禧二年戊午の年から、乾興元年壬戌の年まで、凡そ五年の事を記す)

第四十六回 達達国、宋を拳伐せんことを議り、楊宗保、兵もて西夏を伐つ

第四十七回 宋天神、大いに宋將と戦い、白聖將、陣にて張達を斬る

第四十八回 楊宗保、金山に困陥り、周夫人、救兵せんことを力主る

第四十九回 杜娘子、大いに妖党を破り、馬賽英、火もて番宮を焼く

第五十回 楊宗保、西夏を平定し、十二婦、勝を得て朝に回る

関連史実年表

解説 井上祐美子

プロローグ ～南北宋志伝について～

読者の皆様、『楊家将演義』本編をお読みいただくにあたって、いささかの前座嚙におつきあい願います。本書『楊家将演義』は原題を『北宋志伝』といい、明代に成立した英雄戦記物語です。北宋（九六〇―一二二七年）の初期、宋と遼（契丹）の戦いの中で、北漢から宋に帰順した將軍一族楊家の三代に亘る活躍を描いています。楊家将の物語は、中国において『三国志演義』や『水滸伝』に次いでよく知られた物語で、古くから芝居や口承芸能でも流布し、今なおテレビドラマや映画、ゲーム、漫画などのリメイクが後を絶ちません。その詳細は、本書と併せて刊行される『楊家将演義 読本』をお読みください。

さて、実はこの『北宋志伝』は、『南宋志伝』という物語とセットになって『南北宋志伝』（あるいは『南北両宋志伝』）というタイトルで刊行されてきました。ただし、『南宋志伝』といっても現在私たちが中国史で知っている南宋（一二二七―一二七九年）のお話ではありません。『南宋志伝』は、五代十国時代（九〇七―九六〇年）、王朝が交代し、王国が乱立する中で頭角を現した趙匡胤（後の宋の太祖）が、宋王朝を建国して皇帝になるプロセスを描いた物語です。

このように、『南宋志伝』は趙匡胤を主人公とした宋王朝成立前の物語、『北宋志伝』は楊家将を主人公とした宋王朝成立後の物語であって、内容はそれぞれ別個の物語ですから、『南宋志伝』を読んでい

ないと『北宋志伝』のストーリーがわからない、ということはありません。しかし歴史は連続していませんので、宋の太祖はむろんのこと、『北宋志伝』に登場する人物が『南宋志伝』の時代から登場していることはあります。楊家将についていえば、『南宋志伝』の第三十三回の途中から第三十五回にかけて、楊家将が初めて登場する場面があります。楊家当主楊業はじめ七人の息子たちの名乗りがあり、しかも何やら楊家将の将来を暗示するような予言の場面もありながら、その後は、『北宋志伝』まで楊家将の登場はお預けです。つまり、この場面は楊家将物語である『北宋志伝』の予告編といった位置づけとしても見ることでできる場面であります。

そこで本書ではプロローグとして、『南宋志伝』の楊家将登場場面を訳出してご紹介することといたします。時代は、五代十国の後周王朝の治世。趙匡胤は後周の世宗に仕え、北漢の晋陽城攻めに加わっています。後周軍に敗北を喫し、晋陽城への激しい攻撃に辟易した北漢側は、援軍を求めようとしています。その時、北漢の將軍丁貴が推薦したのが楊業率いる楊家將軍団でありました。

※

※

※

この時、丁貴たちは後周軍が勝利したのを見て、兵を出そうとせず、再び城中に退却してしまっていました。そこで世宗は兵を汾水沿いの原野に移し、長い囲みを築いて晋陽を激しくせめたのである。

劉崇は群臣に諮った。

「単令公の全軍が敗れてしまったが、周主は兵を退こうとしない。どうすべきであろうか」

すると、丁貴が奏上した。

「河東の地は、北に遼をひかえ、西は山後〔河北・山西地方〕の地と接しています。周軍がいかにこの城を敵しく包囲しようとも、この地にはまだ出張っていない精銳がおります。山後の応州にいる郝山王金刀楊令公〔楊業〕は、漢の高祖が泰山の重きと頼った人物。強兵を応州に擁しております。この者を召して助けを求めれば、必ず周軍を破ることができましょう」

そこで劉崇はこの言葉に従い、すぐさま山後に使いをだし楊令公を呼びにやった。

楊令公は名を業といい、太原の人である。顔は熟れたナツメのように赤く、頬から顎にかけて豊かな鬚をたくわえている。一ふりの大刀を使い、「楊無敵」と呼ばれていた。七人の息子がおり、長男は淵平、次男は延定、三男は延輝、四男は延朗、五男は延徳、六男は延昭、七男は延嗣と言う。義子に懐亮がおり、この八人はみな弓馬にすぐれ、武芸に精通していた。このころ猛者と言えば、これら山後の兵が最たるものとされていた。

この日、八人が左右にそろって並び軍議しているところに、薛王劉崇が召喚を求めると、使いをよこした、との報告が入った。楊業は宣旨を受けると、牙将の王貴に諮った。

「劉崇様はたびたび周軍に敗れている。このたび呼び寄せられたからには、救援に参らんわけにはいかぬな」

「楊業殿が参るのであれば、それがしも同道いたしたい」

この言葉に楊業は喜び、すぐに王貴と八人の息子とともに精兵二万を率いて、河東へ救援にむかっ

た。一行の軍は、金鎖関まで来たところで留まった。

一方、世宗の軍中に、哨戒の騎兵からことの知らせが入った。すると趙匡胤が言った。

「山後の兵は天下に敵なしと聞いております。陛下は軍営をかたく守り、襲来に備えてください。私が諸将とともに戦います。ご憂慮めされぬよう」

世宗は趙匡胤の言葉に従い、諸将に守りを固めて待機するよう命じた。

この夜、軍営で寝ていた世宗は、二更ごろに夢をみた。

ゆつたりとした衣に幅広の帯を身につけた婦人が、側仕えの女人を数人従えて幕舎に入ってくる。

「陛下、速やかにお退きください。さもなくば、二十万の兵が苦しむことになりましょう。わたくしはこの城の城隍神でございます。お知らせに参りました」と告げると、下がっていく。

世宗は幕舎をでて詳しく尋ねようとするが、足をすべらせてしまい、そこではつと夢からさめた。机に目をやると、四句の詩が墨跡も乾かないまま残されている。

百戦の勝機となれる手始めは、華夷を隔つる汾河なり

周軍は未だ知らずや大水を、精兵数万呑み込まん

翌日、世宗は群臣とこの詩を解き明かそうとしたが、みなその意味がわからない。そこで世宗が民を

召して訊ねたところ、物を知っている年寄りが答えた。

「汾水から十五里はなれた場所に、后妃夫人の廟があります。あの神が靈験をあらわし陛下に知らせに来たのではないでしょうか」

世宗は趙匡胤にことの真相を訪ねに行かせることにした。

拜命して見にいった趙匡胤は、汾水の西南に確かに后妃夫人の廟があった、と戻り報告した。

そこに、歩哨から知らせが入ってきた。北の方角に楊業の軍馬がやってきた、という。

すると趙匡胤が声を上げた。

「私が兵を率いて迎え撃ちます」

世宗はこれに頷いた。

趙匡胤は精兵一万をひきつれ、鄭恩、高懷徳とともに開けた原野に陣を展開した。両軍が近づく。後周の兵たちは、対峙する山後の兵が勇猛であり、单令公の軍とは似ても似つかないことを見とつた。

軍鼓が三つ打ち鳴らされると、総大将の楊業が馬に乗り出てきた。上手は牙将の王貴、下手は義子の楊懐亮である。

「山後の兵の名声は、まことであつたな」と、趙匡胤が言い終わらぬうちに、槍を構えた一人の將軍が馬をあやつり躍りだした。高懷徳だった。

单騎陣前に駆けていき、北漢の將に戦いを挑む。と、向いの陣の旗印がひらめく所から、楊懐亮が手に竹節鋼鞭を躍らせながら真つ先に進み出て、高懷徳を迎え撃った。

両軍は軍鐘や軍鼓を一齐に打ち鳴らした。二將は四十数合打ち合ったが、勝負がつかない。楊業は馬上でしきりに戦いぶりを賞賛した。

日が暮れてきたので、両軍はともに退いた。

楊業は金鎖関に戻ると、王貴と議した。

「今日の周の武將の戦いぶりを見るに、あの者を捕らえてしまえば、他の將は打ち負かせるだろう」

「どのような計略で捕らえるかと？」

王貴の問いに、楊業は答える。

「金鎖関から五里はなれた地に、鉄籠源てつろうげんという山があるのだが。木がなく四方が急峻なので、二個隊を左右に潜ませることができる。懷亮に負けたふりで退却させ、あの周將を待ち伏せ場所に引きつける。私とそなたは関に登って四方の軍馬を指揮し、周將がやってきたところで、きつく取り囲むのだ。これで捕らえることができるだろう」

「まさに、神鬼も考えつかぬ妙計かと」

楊業は軍令を下し、総管の馮益ふうえきに二千の兵を与え待ち伏せに行かせた。馮益はもともと鄆州うんしゅうの太守であつたが、罪を犯したため楊業のもとに身を投じた者である。

翌朝、楊業は旗を掲げ軍鼓を鳴らし、金鎖関をでて戦いを挑んだ。趙匡胤も軍を率いて出ていく。

「昨日は勝負がつかなかったが、今日こそ賊將を生け捕りにし、勢いをくじいてみせる」

高懷徳が言うと、趙匡胤はこれに返した。

「北漢の將軍も強い。あなどるな」

両軍が対陣したところで、北陣の楊業が諸將を率いて馬を出してきた。と、高懷徳が槍を構え、馬を躍らせながら突つこんだ。北陣からは楊懷亮が出張り、竹節鋼鞭を舞わせてこれを迎え撃つ。両者の馬がぶつかった。三合も戦わないうちに、楊懷亮が陣中に逃げ込んでいく。高懷徳が馬を操りこれを追うと、北漢の兵は退いていった。趙匡胤も兵を駆ってこれに不意打ちをかけた。高懷徳は功を立てようと、深追いでいく。

鉄籠源に近づいたころ、ふいに炮音が響いた。馮益の伏兵が飛び出してくる。後周軍を両断した。北漢將の楊延昭（以下、「楊六郎」）が後方の後周兵をきつく阻み、後詰めも進むことができない。高懷徳は鉄籠源に囲い込まれ、どちらを向こうとも出られなくなった。麾下きかには一千の騎馬しかいない。

楊業は関の上で、手に紅旗をもち三軍を指揮し、鉄籠源の入り口を幾重にも取り囲んだ。

趙匡胤は鄭恩とともに関へと駆け進んだが、関門の上から矢が雨のように降り注いでくる。多くの死傷者を出した後周軍は、軍を収めて十五里退き、そこに陣營を張るしかなかった。

楊業は馮益に鉄籠源の入り口を守らせ、劉崇に報告の使いをやった。

楊業が後周軍に勝利したと聞いた劉崇は、使者に羊の肉と酒を関門に届けさせ、楊業の軍を犒なぐさった。楊業は羊肉と酒を受けると、諸軍に分け与え、関門の下に陣營を張らせて管絃を奏で、思う存分酒を飲んだ。

こうして数日がすぎた。

趙匡胤は、高懷徳がとり囲まれてしまったので、打つ手がなくなっていた。

そこに、北漢の陣営が連日酒をのみ楽しんでいて、との知らせが入ったのである。

「やつら、勝利に慢心し、軍務を怠ってやがる。この隙をついて、兵を率いて北の陣営を襲撃すべきだ」と鄭恩ていおんが言うと、趙匡胤は答えた。

「楊業は智勇の将だ。こちらの動きを読み取られ、逆に失策することになるだろうよ。ひとまず数日とどまり、主上が到着してから、高懷徳を救い出す策を図るぞ」

「兄貴、何をそんなに怯んでいるんだ？俺が行って、やつらを破る」

趙匡胤は止めきれず、奇襲部隊を頼みとし、鄭恩についていった。

一方、楊業は日がな一日、諸将と陣営で酒を飲んでた。

「総大将が軍務をかえりみないと。周軍がこれを察知し、こちらの陣営に襲撃をかけてくれば、われらに利はありませんぞ」

王貴が言うと、楊業は笑んだ。

「まさに、周軍が仕掛けてくるのを待っているのだ。必ず破ってみせる。ここ数日毎夜、金星が東西の方角に入っている。今夜来るに違いない。そなたは兵五千をつれて南に待機し、周軍にこの陣営を襲わせるのだ。火の手があがるが見えたら、勢いに乗じて周軍を攻撃してくれ。これで勝ちを得られようぞ」

そこで、王貴は兵を率いて去った。

楊業はさらに、懷亮と楊延徳（以下、「楊五郎」）にそれぞれ一個軍を与え、関の前後に潜ませることにした。後周軍をそのまま通過させ、その来た道をさかのぼり、敵の軍営を襲撃しようというのだ。二人は計を受けて去って行った。また、六郎には火を放って後周軍を攻撃しよう命じた。楊業は段取りをすませると、寨の柵のそばに何するともなく佇たずんでいたが、寨の中に退いて動静を見ることにした。

二更になろうとするころ、鄭恩が二千の歩卒と騎馬兵をひきつれ、密かに前進してきた。趙匡胤が騎馬隊を率いて後ろについている。

遠くみやると、北漢の陣営では時を告げる太鼓の音もひっそりと、しずまりかえって人の声も聞こえない。

備えなし、と判断した鄭恩は、歩兵と騎馬兵をひきつれ大喊声をあげて寨に突入した。しかし、陣営はもぬけの殻であった。鄭恩は驚き、あわてて後詰めを止め、馬にむち打って逃げはじめた。

ふいに金鎖関から炮音が続けざまに響いてきた。寨の外には楊六郎が立ちはだかっている。鋒ほしを交えたが、鄭恩は戦いに執着せず、斜めに斬り出していく。と、ちょうど趙匡胤がやって来るのに出くわした。

趙匡胤が叫ぶ。

「はやく逃げろ。俺が追っ手を食い止める」

「やつら待ち伏せしてやがった。兄貴、力を合わせて抜け戻るしかない」

鄭恩が後ろで中軍を守り、趙匡胤が前軍を突き破っていく。

と、一人の将軍が立ちはだかった。強兵を従えた王貴だった。またひと頻り戦い、兵の多くを失ってしまった。

鄭恩たちは必死の思いで本陣に駆け戻ったが、そこには火の手が上がっていた。左から楊懷亮、右から楊五郎の二個軍が飛びだしてくる。

後周軍は大敗した。数十里ほど敗走したところで、楊業はようやく軍を退いていった。

東の空が明るくなったころ、鄭恩は残兵をかき集め、戻り世宗に拝謁した。

楊家の戦術が神のようであったこと、高懷徳が囲い込まれていること、夜襲をかけたが伏兵にやられ大敗して戻ったことを奏上すると、世宗は言った。

「余が自ら諸将を率い、楊家と決戦する」

すぐさま各營の將帥に命令を下し、諸軍を率いて進発した。汾水の原野のあたりに来ると、金鎖関から二十里ほどの場所に軍營を構え、趙匡胤、鄭恩、符彦卿、史彥昇の四將に、兵を率いて関に戦いを挑みにいくよう命じた。

一方、楊懷亮はここ数日のあいだ心が騒いでいた。

「俺は鄆州の生まれで、父母には二人の息子がいた。兄の懷徳と別れ別れになって一年になるが、行方もしれない。先日、周軍と戦ったおり、義父上はあの人をみて、英雄ぶりを称えていた。今、鉄籠源に閉じ込められているのは、もしや俺の兄上ではないのか」

そこで懷亮は、一計を案じた。

「月の夜に一通の書状を認め、鎗矢につけ鉄籠源に射こむ。それをあの人拾えば、必ず返書がくるだろう」

すぐに書をなし、夜も更け寝静まったころ、月明かりのもと矢を鉄籠源に射こんだ。

それから少したった頃のことである。高懷徳は歩卒から報告を受けていた。

鉄籠源の入り口あたりに矢が射こまれる音がしたため、見に行くと、矢に封書がつけてあったので、拾って高懷徳に見せにきた、という。

高懷徳は、書を開いて中を確かめた。

鄆州の高懷亮が申し上げます。昔、父の高辛周は魏州での戦乱により、幽州へと逃げ延びました。

しかし、時局の変化のなかで、期せずして父が身罷り、兄弟は別れ別れとなりました。兄の高懷徳がどこにいるのかも分かりません。私は日夜思いつづけ、心は千々に乱れております。山後に住み、人の義子となりましたが、このままで良いはずありません。今、偶然にもぶつかった敵軍に、懷徳という名の将軍がいるとのこと。もしや、兄上ではありませんか。そうであるならば、弟懷亮はこの上もなく幸せです。そうでなければ、また全力で助けに向かうまでのこと。軍中では内密にやりとりせねばなりませんので、速やかにご返信を。

某日、鄆州の高懷亮、再拝して書す

読みおえた高懷徳は、ふいに涙をこぼし、

「弟とはぐれてより、生き死にもわからなかったが、ここにいたとは。父の霊はわれらを見守り、天はわが高氏を滅ぼさなかった。そうでなければ、このような大機は得られなかっただろう」

すぐに返信を書き、鎗矢につけて鉄籠源の外へ射ると、配下の者に告げた。

「注意して、固く守るのだ。もう少してこの危難から脱することができ」

一方、軍営にいた懷亮のところに、書状がついた鎗矢を拾ったのでご確認いただきたい、との知らせが入った。

鄆州の高懷徳、書状にて我が弟の懷亮に知らせる。幽州にて離散し、汴京に入りてより早一年。父は既に身罷り、わが弟が何処に流れ落ちたのかも分からなかった。だが先ほど、知らせの書状を得て、ようやく真のを知ることができた。これは誠に天意が、我ら兄弟を再び見えさせてくれたということだろう。現在、私が包囲されてから十数日経ったが、糧食はすでに尽き、死が目前まで迫ろうとしている。弟よ、急ぎ方策を練り救出を図ってくれぬか。取り急ぎ、返書のみいたす

読み終えると、懷亮ははらはらと涙を流した。書を捧げもち、

「天の加護がなければ、あと数日で、兄上は屍も残らぬほどの窮地に陥るところであった。俺も、何も

できなかっただろう」

そこで馮益に会い、告げた。

「私は鄆州の生まれです。父は高辛周といい、息子が二人おりました。今、わが兄の高懷徳は周軍の陣中にあり、鉄籠源に囲い込まれております。この愚弟、これを知り、兄を助けたく総管にご報告に参りました。お許しがでなければ、兄とともに死なせて頂きたい」

馮益はこれを聞くと、奮いたち、

「事は機密にかかわる、慎重に扱わねばならん。私も周の臣下であったが、罪を犯したため山後に身を投じたのだ。かくなる上は、私もそなたとともに救援にむかい、そなたの兄を携え周の朝廷に帰順するでしょう」

「総管より賜ったこのご恩、黄泉まで忘れません」

そこで馮益は、密かに命をくだし後周の軍営に人を送った。自分の軍兵を内応させるが、夕刻ごろに鉄籠源の入り口の囲みを解き、合図の炮をならす、と知らせたのだ。

こうして、高懷徳は外で炮が響いたのを聞くと、すぐさま歩兵と騎兵を率いて鉄籠源の入り口に駆けつけていき、馮益の軍と合流して金鎖関へと突進していったのである。

一方、金鎖関に偵察の騎兵から知らせが入った。

ことを聞いて驚いた楊業は、楊六郎に騎馬二千を与え追わせることにした。六郎が兵をつれてまっすぐ関の外まで出ると、懷亮らがやって来るのに出くわした。

「なぜ裏切った」

六郎が問うと、懐亮は答えた。

「兄弟の情だ。救わねばならない」

二人はともに武器をかざし、関の外でぶつかつた。数合戦つたが、勝負がつかない。とそこに、南から一隊の騎馬軍がかけてきた。先頭を走る一将は、鄭恩である。飛ぶように馬を走らせ刀を振り回しながら、六郎にあたつてくる。さらに馮益が後軍を駆つて突つこんできたため、六郎は勢いに支えきれず、馬をかせせ急ぎ戻つていった。

懐亮は後周軍と一所に合流し、世宗に見えた。

世宗は、高懷徳を救出した上に、多くの軍馬も携えてきたのを見て、大いに喜び、馮益を教練使に封じ、高懷亮を副先鋒とした。二人が拝謝すると、世宗は軍を分けて金鎖関を奪取するよう、諸將に命じた。命を受けた將士たちは、みるまに攻撃の氣勢を高めていく。

一方、馮益と高懷亮の裏切りに遇つた楊業は、憤つたが手遅れだつた。そこで諸將を召して軍議をひらいたところ、王貴が言つた。

「周軍は、汾水の原野に六つの軍営をつらね、この関を攻撃しようとしています。すぐさまこれと戦えば、不利となるでしょう。敵の隙に乗じて攻撃を仕掛ける方が良いかと。さすれば、勝ちをえられるでしょう」

楊業はこの計を聞き入れ、諸將に兵を抑え出陣しないよう命じた。

数日が過ぎた。

楊業は歩卒と騎兵をつれて小高い丘にのぼり、あたりを見渡した。後周の軍営には旗が整然とならび、士卒は雄々しげに、汾水ほとりの原野を包囲している。ふと、白いしぶきを滔々とあげる龍川が、汾水に接して勢いよく流れているのが目に入った。楊業はその様子をみてそつと喜び、軍中に入ると王貴らに言つた。

「周軍数十万の兵は、すでに捕らわれたも同然だ」

「なぜそのようなことが？」

諸將の問いに、楊業は、

「地形を読み解けねば、どうして生きのびられようか」と答えたが、諸將は信じられないでいる。

時は八月の初旬、秋雨が数日にわたりひどく降り続いている。楊業は、人をやつて船や筏を用意させ、水具を整えた。

すると六郎が父に訊ねた。

「陸地で兵を戦わせるのに、なぜ船を用意なさるのですか」

「おまえは知らぬだろうが、兵法に『軍の窮地におちいるは、天候に乱れあり。これ必敗の道なり』とある。今まさに秋雨が連日ふつている。汾水はかならず増水していよう。すでに人をやつて各所の水門をふさがせた。水があふれそうになったら、水かさが高いのに乗じ一気に放水する。汾水の原野にいる兵は、みな魚の餌となるう」

楊業が言う、六郎たちは再拝した。

「父上の神機妙算は、常人の及ぶものではありません」
これぞまさに、

策もて豪傑とりこにし、謀はかりごとにて帝王捉とらう

といったところ。

一方、後周軍は連日大雨にふられ、軍営中がずぶ濡れになっていた。

趙匡胤は世宗に拝謁し、

「今、わが軍は汾水沿いの原野に軍営を並べておりますが、ここは地形が非常に低く、前に流れる龍川の水も、氾濫しそうな勢いでございます。ここ数日、秋の雨が降り止んでおりません。もし楊家の兵が水の勢いを利用し戦いを挑んできたなら、どのように防ぐかお考えでしょうか」

「余もそのことが気がかりなのだが、講ずる策がみあたらぬ」

世宗は答え、すぐに王樸おうぼくを呼びこれについて問うた。

「私が夜に星を観ましたところ、わが軍営に殺気が集まっております、当方に不利と出ております。ですが速やかにこの軍営を引きはらえば、災いを免れることができますよ」

と王樸が言い終わらぬうちに、ふいに幕舎の外から騎馬の大軍がかけくる音が響いてきた。軍太鼓の

轟とどろきが天を震わせている。

驚愕した世宗が、急ぎ幕舎をでて馬に乗ろうとしたその時、四方八方から大量の水が爆はぜるように流れこんできた。

各軍営の将帥たちは船を用意しようとしたが、間に合わない。兵卒は乱れ逃げ惑い、波に追いつかれてのまれていく。その数は計り知れない。世宗の軍営にもすでに大水が激しくぶつかっており、平地の水深が一丈あまりとなっていた。

趙匡胤は世宗を護ることしかできないでいた。軍卒たちを顧みる余裕もなく、まっすぐ斬り出し高台まで駆け上っていく。と、楊業父子がみな脚の速い船にのり、旗をなびかせ軍鼓を打ってやってきた。

世宗が岸沿いに遁走していくのを見た楊業は、馬を用意させ岸に上がって捕らえに向かった。

趙匡胤は槍をかまえ馬を躍らせ、雷のような雄叫びをあげながら、楊業を抑えんと鋒を交える。二人が数合打ちあったところで、王貴も単騎かけてきた。趙匡胤は慌てた。とその時、原野の北の端から天を震わす喊声があがった。鄭恩、高懷徳、符彦卿だった。みな決死の様相で斬り込み、世宗を護りながら先にかけていく。趙匡胤は楊業としばらく激しく戦ったが、形勢不利とみるや、馬にむち打って横からぬけだした。楊業は、逃すまい、と勢いをつけこれを追いかけていく。趙匡胤は、龍川の堤を駆け抜けようとしたが、泥道に脚をとられて滑り、人馬もろとも川に落ちていった。楊業はこれに追いつき、大刀をふるって勢いよく斬り下げようとした。

その刹那、ふいに激しい雷鳴が轟とどろき、趙匡胤の頭上に八爪の金龍があらわれた。

楊業は刀を振り下ろすことができない。馬を止め、刀を引いた。

「真の天子であったか。斬ることはできぬ」

楊業の言葉が終わらぬうちに、趙匡胤が馬に乗ったまま川から飛び出してきた。楊業がまだそこにいるのを見て、また馬を駆って逃げようとする。

楊業は、

「そちらに進めば、袋小路となる。疾く戻られよ。今日、楊業が殺さずにおいたこの恩を、お忘れめされるな」と言うや、馬首を返して南岸へ走り去っていった。周静軒の詩にいう。

英雄の腕立てするに運悪しく、追い詰めらるるも戦止む

駿馬転ぶも跳ね起きて、帝の威風天下を覆う

趙匡胤がしばらく考え込んでいると、突如、西岸から軍鼓が響いてきた。鄭恩が兵をひきつれ救援にきたのだ。

二人が兵を合流させ駆け戻ると、水の勢いは増しており、どの軍営もみな水につかっていた。この大水に遭って命を留めたものは、一、二万人に過ぎなかった。その様が詩に詠まれている。

万の馬駆ける勢い潮のごと、一気に兵士を押し流す

憐れやかな岸にむくろの数知れず、怒涛の中に冤声あり

夕刻になるうとしていた。陽が影を落としてはじめている。楊業は後周軍に大勝して、ようやく軍馬をおさめて軍営にもどっていった。

後周の諸将は世宗を護り数十里退却したところで陣を構えたが、趙匡胤と鄭恩がみあたらない。と、まもなく趙匡胤と鄭恩の二人が駆け戻ってきたので、みなは少しく胸をなで下ろした。文武の官や随従の者たちも、次第にまた集まってきていた。

世宗は多くの軍馬が失われたのを見て、齒がみしたが、手遅れである。

諸将に向かって言った。

「数日前、すでに神人がこのことを告げていた。しかし余が備えをしないうちに、夢告げの通りとなつてしまった」

「天運がこのように定まっていたのならば、やはり逃れることはできなかったでしょう。勝敗は兵家の常、と申します。どうか厳しくお咎め召されぬよう」

と王樸が答えると世宗は言った。

「晴れを待つて楊家と決戦し、恨みをはらしてくれ」

これに趙匡胤が声を上げた。

「軍卒の大半が負傷し、軍糧も途切れております。再び戦を議すとしても、前方には強兵が、後方には

劉崇がおります。わが軍に利はございませぬ。軍を汴京に戻し、再起を図るのがよいかと。思いますに、劉崇は袋の鼠も同然。逃げおおせぬでしょう」

そこで世宗が趙匡胤の言葉に従い、軍に詔を下すと、命を受けた各軍はみな喜んだ。すると、葉元福が進みでた。

「陛下、進軍は易く、退却は難し、と申します。今、楊家軍は劉崇の氣勢と一体となっており。わが軍が退却することを知れば、兵を出し追撃して参り、はなはだ不利となるでしょう。今できる計としては、兵に隊伍を組ませ、殿の軍を前衛として先行させ、追っ手を防ぐことかと」

「そなたの言、もつともである」

世宗は命を下し、高懷徳、懷亮、馮益を先鋒とし、鄭恩、葉元福、馬全義に強兵を与え後ろを守らせた。自らは趙匡胤、張永徳、符彦卿、史彥昇、王樸そして近衛軍とともに中軍につくと、軍をすぐさま出発させ、陣営の跡を焼き払っていったのである。

一方、水攻めの計略をもちいて、後周軍を汾水の原野で大破した楊業のもとに、後周軍が軍営をひきはらい戻っていく、との知らせが入った。

五郎が進み出て、

「私が軽騎兵をつれて追撃し、周の世宗を捕らえてみせます」

「周軍には知恵者が多い。あれだけの大軍が退いたのだから、備えは必ずある。追撃すれば、反対に計にかかるとなるう」

楊業の言葉に、五郎は追撃を思いとどまった。

楊業は劉崇のもとに戦勝の報告を送った。

知らせをうけた劉崇は深い溜息を落とし、

「高平での戦いも、この者がいたならば、大敗することはなかっただろう」

すぐさま丁貴に羊、酒、金銀などの褒美を楊業の軍営にとどけさせ、その労をねぎらった。楊業は褒美を受けると、それを兵たちに分け与えたので、みなは喜びにわいた。

翌日、楊業は丁貴に従って城中にはいり、劉崇に目通りして拝謝した。

劉崇は楊業を慰撫し、

「遠くからよくぞ参つてくれた。周軍に勝ち、大いに威力を見せつけてやった」

「諸将が力を合わせ、幸いにも勝ちを得られたまでのこと。大したことはしておりませぬ」

そこで劉崇は、便殿に宴を張り楊業を歓待した。心ゆくまで楽しんだところで、この日の宴は散会となった。

次の日の朝、楊業は薛王劉崇に暇を告げ、

「遼の狡知は測りがたきものにございます。府庫の財物をすべて与えてしまつては、自ら国を危うくすることとなりましょう」

劉崇はこの言葉にうなずき、楊業にさらに金や珠玉など貴重な宝を下賜した。楊業はこれを受けとり軍中にもどると、部隊を率いて陣営をひき払い、帰路についたのである。

黙々とひたすら進み、五台山近くまでやって来たところで、楊業は王貴に言った。

「五台山には智聡長老という、過去未来を見渡せる方がおるそうだ。得難い機会だ。王貴、共にこの方を訪ねてみんか」

「その方のことは以前より耳にしていました。もとより同道いたしたく」

そこで、楊業は兵卒や馬を五台山のふもとに駐屯させ、翌日、王貴と息子ら十数人をもたない玄真観に向かった。到着して馬を下り、楊業が知らせをやったところ、智聡が出迎えにやってきた。

一行が方丈に入り、主客に分かれて座ると、侍従の小童が茶をもって来たところで、智聡長老が口を開いた。

「將軍のご一行がここまでお運びになったのは、何用か」

楊業が答える。

「私は太原の者で、武門の出。姓は楊、名を業と申す。先ごろ河東の難局に救援へ参り、その帰路にあります。以前より、禪師が禍福を見通すと聞いており、行く末をたずねに参った次第。包み隠さぬお教えを乞いたい」

「將軍のご名声はかねてより。拙僧にもご縁があったわけですな」

楊業は従者に金十両と節糸織の絹と練り絹の二疋の礼物を渡させたが、智聡は受けとろうとしない。

楊業は言った。

「これは心ばかりのもの。お会いできたご挨拶の気持ちを、いささかお示ししたまで。お受け取りくだ

され、禪師」

そこで智聡が小童に受け取らせたので、楊業は七人の息子を呼び、智聡に見てもらった。

智聡は一人一人見てから、口を開いた。

「みな当世の豪傑である。拙僧ごときが何をか申そう」

「直言を頂いても、決して咎め立ていたさぬ。どうか、はつきりと申されよ」

智聡は笑った。

「楊業殿、ご立腹めさるな。拙僧も隠さぬゆえ。七人の將軍を子細にみたところ、ともに忠国勤王の相貌しておられる。ただ、惜しむべきは、一本気な質がはつきりと出すぎております。みな天寿を全うできぬかと。七郎殿は眼の中に二つのひとみがあり、箭の災厄を免れ得ませぬ。ただ六郎殿だけは、容貌が伸びやかであり、官位を全うできるでしょう。ですが、生涯にわたり安樂をえることはありませんぬ。このようにつまらぬことを述べ申したが、お許しあれ、楊業殿」

楊業は聞き終わるや、手を打って笑った。

「大丈夫たるもの、戦場で死ねばそれでよい。何の気にかけることがござろうか」

日がすでに暮れていた。

智聡は酒を用意させもてなし、宴席では各々が平生思うところを語った。宴もたけなわになり、夜が更けたので、楊業たちは玄真観に泊まることとなった。

この夜、楊五郎は眠れないでいた。昼に智聡長老から占われたことが、心にわだかまっていたのだ。

と、五郎は衣をまとい、ひそかに智聡に会いに僧房へとむかった。

智聡長老が問う。

「休まれず、ここにおいでになったのは、何のご用か」

「今日、禪師のお言葉を聞き、とても不安になったのです。どうか生き残る道の一つをお教えください。死してもご恩は忘れません」

「これは定めである。拙僧ごときがどうして助けられようか」

しかし、五郎が再三にわたり懇願するので、智聡は言った。

「將軍が危難を脱したいと思うならば、遠くに逃れ、山林に身を隠すしかあるまい。さすれば、禍を免れることができよう」

「禪師のお言葉、もつともです。しかし、父と子は相い随うもの、どうして別れられましょう」

「これは、天機であるゆえ、ゆめゆめ漏らさぬよう」

智聡長老は言う、皮の小箱を取りだし五郎に与えた。

「普段はこれを開いてはならぬ。急難を極めた時に、開いてみるがよい。なかに將軍を助ける策がはいっておる。くれぐれも忘れることなきように」

五郎はこれを拝受して去っていった。後の人がこの様子を詩に詠んで称えている。

行く末を案じて天命占えば、智者憐みて戒むる

この時に禪師の教えなかりせば、いかで出家をするものぞ

夜が明けると、楊業は王貴らとともに智聡長老に別れの挨拶をし、みなで五台山より一路応州へと戻っていった。

一方この時、遼が兵を率いて忻州しんしゅうに駐屯していたのだが、楊業が後周軍を汾水の原野で大破したとの知らせを聞き、軍を退いて国へと戻って行ったことは、ここまでのこととする。

※

※

※

このように、宋の太祖趙匡胤と楊家将は、はじめは敵対して遭遇するのですが、それがどのようにして君臣の關係に至るかは、本編をお読みいただくとしましよう。さて、『南宋志伝』では後周の世宗が崩御したのち、幼い皇帝が即位しますが、そこへ遼と北漢が攻めてきます。これを迎え撃つ趙匡胤は、後周の軍人たちから皇帝に相応しい人物として擁立されます。これが歴史という「陳橋の変」です。そして後周から禅譲を受けて正式に皇帝に即位し、宋王朝を開きました。趙匡胤はさらに各地のまつろわぬ国々を次々に討伐していきます。最後に残ったのが、宿敵の北漢でした。宋軍、北漢に迫る——『北宋志伝』即ち本書『楊家将演義』は宋の北漢征伐から始まります。それでは、本編をお楽しみください。